秀人と愛斗！～The Another Story～

ゼロ＆インフィニティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秀人と愛斗！～Ｔｈｅ　Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｓｔｏｒｙ～

【Ｎコード】

Ｎ６７６７Ｍ

【作者名】

ゼロ＆インフィニティ

【あらすじ】

秀人と愛斗！、それは残酷な運命の物語。では、本当に皆が求めていた世界とは？

本編とは違う世界観で、本編のキャラが平和に過ごす。そんな感じの平和なストーリーです。本編とは違う平和な世界での物語をどうぞ。詳しくは自分の初作品である「秀人と愛斗！」をどうぞ。

1話　始業式の日は一番乗りしたい（前書き）

それではお楽しみ下さい。ご意見、ご感想、ご要望ありましたらどうぞ。

1話　始業式の日は一番乗りしたい

まだ数人しかいない教室のドアが勢いよく開かれる。入ってきた少年の名は識神秀人。今年、この朧月学園に入学した新入生だ。
「朝早く来ると気分がいいな～」
秀人は自分の机に荷物を置くと、他のクラスメイトを待った。
少し経って入ってきたのは黒髪の女子であった。
「おはよう。秀人くんだよね？」
秀人は感激した。登校初日に女子、しかも可愛い子に声を掛けられるなんて中々いいスタートじゃないか？
「おはよう。君は？」
「私は南風渚！今日からよろしくねっ！」
「あぁ、よろしく」
秀人は軽く返事を返すと、教室のドアに視線を移した。
丁度、水色の髪をした少年が入ってきた。
「おはよう」
秀人はその少年にも挨拶をした。
「よぉ、おはよう！」
妙に親近感がある少年はの名札にはイヴォン・フックスとあった。
「イヴォン・・・でいいのかな？」
「あぁ、オーケーだ」
イヴォンは秀人の前の席に座った。そして、トランプを出した。
「どうだ？えっと秀人？トランプでもしないか？」
「いいけど、いいのか？教室でトランプして・・・」
「大丈夫だって！お前も覚えたほうが儲かるぜ？」
秀人は儲かる、が気になったが始める事にした。
教室にはどんどん生徒が入ってきた。秀人が気になったのは最後に入ってきた二人である。気になる理由は一目瞭然だ。黒髪の青年が綺麗な亜麻色の髪をした少女を抱きかかえながら、そう、お姫様

抱っこをしながら入ってきたのだ。
教室の視線が二人に向かう。イヴォンが立ち上がった。
「よぉ、愛斗！今日も朝からラブラブ、新婚だな！」
愛斗と呼ばれた青年はイヴォンを睨んだ。
「イヴォン、余計な事を言うな。誤解を招く」
いや、何も言わなくても誤解するような絵面だが・・・。秀人はスルーした。秀人の得意な事、それは現実をスルーする事である。その特技を生かし、スルーして近づいた。
「おはよう。えっと、愛斗くん？」
愛斗は頷いた。
「愛斗でいい。秀人だな？」
「うん。そうだけど・・・」
やはり、抱きかかえられている女の子が気になる。年は秀人たちよりずっと年下に見えるが・・・。
愛斗はその子を席に座らせた。
「リリー、どうだ？学校は？」
リリーと呼ばれた少女が愛斗を見て言った。
「愛斗さんのお陰で学校に通えるなんて夢みたいです。ありがとうございます」
リリーは鞄から可愛らしい筆箱を取り出し、机に置いた。その様子を見た愛斗はリリーの頭を撫でた。
「俺は今からジュースを買いに行くが、一人でも大丈夫か？」
リリーの胸で金色のロケットが陽の光を浴びて、光った。
「愛斗さん、私は大丈夫ですから心配しないで下さい」
愛斗は頷き、教室から出て行った。
秀人はイヴォンに尋ねた。
「なぁ、知り合い？それにあの子何？」
「愛斗は俺の幼馴染みたいなもんさ。リリーは戦争で怪我したんだけど、愛斗のお陰で目は見えるようになったんだ。足はもう少しリハビリが必要で、まだ立てないんだ。だから、愛斗に運んでもらっ

ているって訳」
秀人は納得した。
「とても優しいんだね」
「まぁ、俺には只のロリコンにしか見えないけどな」
「全くだ」
秀人が振り向くと、そこには一人の青年が立っていた。
「よぉ、ロラン。セドリックも」
二人は秀人を少し見て、リリーに視線を移した。
「しかも、一緒に住んでるとか・・・いいのか？」
「学校も認めてるからな・・・」
「羨ましいぜ」
ロランはぼそりと呟いた。イヴォンが呆れた感じでロランを小突いた。
「よく言うぜ。お前も年下の可愛い彼女がいるだろ」
ロランは顔を赤らめた。
「ロラン」
ロランの後ろから可愛らしい声が聞こえた。
「おっ、噂をすれば何とやらだ」
秀人はロランの後ろの少女を見た。リリー程ではないが、十分小さい子だ。ロランが振り向く。
「カミーユ、俺に・・・って！お前！そのスカート！」
秀人は頭がクラクラした。カミーユの履いているスカートは短かった。いや、短いってレベルじゃない。歩けば、下着が見えそうな程に短い。
「これしか無かった」
「いやいや、これしか無いって・・・とにかく着替えろよ！」
イヴォンが珍しそうに眺めた。
「いや、これはアリだぞ！」
イヴォンはロランに殴られた。
「人の彼女を変な目で見るんじゃねぇよ！」

秀人がイヴォンを起こそうとしたとき、教室の後ろから舌打ちが聞こえた。
「朝からイチャついてるんじゃねぇよ！」
声の人物は茶髪の青年だ。名札にはジェラルド・カーペンダーと書いてある。
「どうでもいいですけど・・・その位置・・・」
ジェラルドは教室のロッカーの上に胡座をかいて、携帯電話を弄っている。
「俺の勝手だ！気にすんな！」
秀人は頷き、スルーした。その時だ、教室のドアが勢いよく開いた。黒髪のいかにも真面目そうな少女が入ってきた。
そう、例えるならいかにも風紀委員って感じだ。少女の名札には木下亜麻音（きのしたあまね）と書いてある。亜麻音は教室を見回し、始めにイヴォンに近づいた。
「貴方！教室でトランプは校則で禁止されています！没収です！」
「は？」
イヴォンが惚けた声を出してる内にイヴォンはトランプを手から奪われた。
「ちょ、返せよ！」
「駄目です！」
亜麻音は次にロランとセドリックを見た。
「貴方たち！シャツが出ています！直しなさい！」
二人は勢いに押されて、服装を直し始めた。亜麻音の次のターゲットはジェラルドだ。亜麻音はジェラルドの足を掴み、ロッカーから引きずり降ろし、携帯電話を奪い取った。
「返せ！」
しかし、ジェラルドの声を無視し、亜麻音は携帯電話をポケットにしまいこんだ。亜麻音はカミーユを睨む。
「貴方！そのスカートの短さは何ですか！破廉恥です！直してきなさい！」

カミーユは何も言わずに教室を出て行った。亜麻音の攻撃は止まらない。次はリリーだ。リリーの前に亜麻音が立った。リリーが亜麻音を見上げる。
「貴方！学校にアクセサリー類は禁止です！没収します！」
亜麻音はリリーの首から金のロケットを取ろうとした。リリーはその手を振り払う。
「止めて下さい！これは愛斗さんから貰った大切な物で・・・きゃっ！」
渚が席から立ち上がり叫んだ。
「ちょっと、亜麻音！やり過ぎよ！」
「いいから渡しなさい！」
亜麻音はリリーを地面に押し倒し、首からロケットを奪った。地面に倒れたリリーは起き上がれない。
「返して下さい！お願いします！」
リリーは半泣きで叫んだ。秀人が止めに入ろうとしたが、イヴォンに止められた。
「ちょ、イヴォン！何すんだよ！止めないと！」
「いいから見てろ！」
イヴォンの気迫に押されて、秀人は後ろに下がった。その時だった。亜麻音は突き飛ばされ、地面に転がった。手からロケットが離れる。そのロケットをリリーが素早く拾った。
「誰！？」
そこに立っていたのは愛斗だった。
「お前、リリーに何をしていた？」
「違反物を没収しただけよ！貴方こそ何？人をいきなり突き飛ばして！」
愛斗は手に持っていた缶ジュースを握りつぶした。
「リリーを泣かしただろ。お前だけは許さない！」
愛斗はリリーを抱きかかえ、椅子に座らせた。そして、亜麻音に向き直る。二人の間で火花が散る。

しかし、亜麻音は向きを変え、他の生徒の方に向かった。
「アルマさん！香奈さん！学校で香料は禁止です！」
「おい！俺の話はまだ終わってない！」
亜麻音を追おうとした愛斗の手をリリーは掴んだ。
「愛斗さん、もういいですよ」
「しかし・・・」
「いいんです。彼女も悪気があった訳ではないんですから」
愛斗は腑に落ちない顔だったが、仕方なくリリーの言ったとおり許す事にした。
「まぁ、リリーがいいならいいが・・・」
丁度、ドアが開き担任が入ってきた。
「皆、席につけ！」
全員が席につき、担任を見た。
「今日から君たちの担任になったオスカーだ。よろしく！」
全員が挨拶をする。
いよいよ新しい学校生活が始まる！

2話　この二人をどうにかしないと・・・（前書き）

今回はリリーと愛斗がとことんイチャつきます。ご了承ください。
それではどうぞお楽しみ下さい。

2話　この二人をどうにかしないと・・・

「じゃあな、みんな」
愛斗は秀人たちに手を振った。自転車の後ろにはリリーがちょこんと座っている。
「あぁ、また明日」
イヴォンたちも手を振り返す。
「皆さん、また明日」
リリーもにこやかに手を振る。

ここから二人の時間が始まる。
「リリー、確かシャンプーを切らしていたな。スーパーに寄るがいいか？」
「はい、構いません」
愛斗は頷き、自転車を扱ぐスピードを速める。
「リリー、寒くないか？」
「もう春ですよ。平気ですから心配しないで下さい」

スーパーの前、駐輪場に自転車を止めると愛斗は自転車の後ろに座っているリリーを抱きかかえ、店に常備されている車椅子にそっと乗せた。
「じゃあ、行くぞ」
「はい」
スーパーに入ると、リリーはまず一言感想を漏らした。
「いい香り、コロッケですか？」
「そうだな。リリーはコロッケが食べたいのか？」
「そうですね。たまにはいいかもしれませんね」
愛斗は頷き、惣菜コーナーからなるべく揚げたてのパックを選び、籠に入れた。

次に向かったのはシャンプーが売っているコーナー。そこで愛斗はシャンプーを見比べる。
「どうだ、リリー。何時もと同じのでいいか？それとも新しい種類にするか？」
「そうですね～。何時ものでお願いします」
愛斗は何時ものシャンプーを籠に入れた。お会計を手早く済ませ、自転車に戻る。愛斗はリリーを車椅子から持ち上げて、自転車の後ろに乗せる。
「よし、リリー。背中にしっかり掴ってろ」
「はい」
自転車は家に向かい、速度を上げ始めた。

愛斗とリリーの家は大きなお屋敷である。広い庭園があり、畑もある。この広い家に二人しか住んでいないのが驚きだが。
愛斗はリリーを再び抱きかかえ、屋敷の玄関に向かう。鍵を開け、中に入ると直ぐ両手が塞がっている愛斗の代わりにリリーが電気をつける。
「ありがとう、リリー」
「何時もの事じゃありませんか」
この動作は毎日やる事だが、愛斗は毎回リリーに礼を言う。
愛斗はそのままリリーを洗面所に連れて行った。洗面所の椅子に座らせ、靴下とストッキングを脱がせた。
「愛斗さん、くすぐったいです」
「自分でやるか？」
愛斗は尋ねた。
「いえ、お願いします」
愛斗は脱いだ物を洗濯機に入れる前に洗面所の片隅の籠に置いた。次に脱ぎやすいように制服のボタンを外した。ここから先はリリーが自分で脱ぐ。
「リリー、俺はお前が風呂に入っている間に夕飯の支度をするが、

何かあったら直ぐに呼んでくれ」
「分かっています。毎日言いますよね、その言葉」
愛斗はリリーの頭を撫で、キッチンへと向かった。

愛斗はリリーが風呂に入っている間にフライパンで冷蔵庫から取り出した牛肉を二枚焼き始めた。
「今日はステーキだ。リリーも喜ぶな」
愛斗はリリーの笑顔を見るのが何より楽しみだ。いい具合に焼けたステーキにワインを入れる。
愛斗が丁度、夕飯の支度を終えた頃、リリーの声が洗面所から聞こえた。
「愛斗さん、お願いします」
愛斗は直ぐに洗面所に向かう。リリーは先ほどと同じような姿勢で、胸にバスタオルを巻いて椅子に座っている。
リリーの服を他の棚から出し、リリーに手渡す。リリーが上を着る間に愛斗は靴下を履かせる。
「相変わらず細いな。リリーの足は」
「そうですか？ありがとうございます」

着替えが終わったリリーは愛斗の横で車椅子に座っている。
「今日は天気がいいし、テラスで夕食にしよう」
「いいですね」
愛斗は屋敷の二階のテラスにある白い円形のテーブルに純白のテーブルクロスをひいた。そこに料理を並べる。
準備が出来ると愛斗は下に降り、リリーを車椅子から抱きかかえてテラスの椅子に座らせる。そして愛斗も反対側の席に座る。
「じゃあ、リリー。夕食にしよう」
「はい、頂きます」
二人のディナーが始まった。リリーはナイフとフォークを器用に使い、ステーキを小さな口に運んでいく。愛斗はそんなリリーの顔

をとても優しい笑顔で見守る。この瞬間が至福の瞬間なのだ。
そんな風に微笑む愛斗を見て、リリーは悪戯っぽく笑った。
「愛斗さん、目を瞑って口を開けてください」
愛斗は素直に目を閉じ、口を開いた。リリーはステーキをフォークで刺し、愛斗の口に運んだ。
「はい、愛斗さん、あ～ん」
愛斗はそれを口に含んでから目を開けた。
「美味しいな。ありがとう、リリー。俺からのお返しだ」
リリーは目を閉じ、口を開く。
「美味しいですね。愛斗さんの料理」
「当然だ。お前に食べさせる料理は美味しいのが最低条件だ」
夜風に吹かれながら二人のディナーは続く。ディナーが終われば次は愛斗が風呂に入る。愛斗は外での食事の時にリリーに必ず一枚ストールを羽織らせる。湯冷めをしては大変だからだ。

愛斗が風呂から出ると、愛斗は直ぐに後片付けを始める。その間、リリーは常に愛斗の目の届くところにいる。
片付けが終われば寝る時間。愛斗はリリーを抱きかかえ、寝室に向かう。寝室の電気は点けずに枕の上の照明のみを点ける。愛斗はリリーをベッドに優しく乗せる。リリーはこの瞬間が一番嬉しい。軟らかい布団に横たえられ、愛斗の暖かい手が、胸が傍にある。
だから遂、甘えてしまう。
「あの・・・愛斗さん？その・・・お休みの・・・」
愛斗は全てを分かっているような顔でリリーの頬に優しくキスをする。リリーも愛斗の頬にキスをする。
その甘えタイムが終わると、愛斗はリリーの横に入り必ず、
「お休み、リリー。明日も元気で」
この言葉を言う。愛斗が照明を消すと真っ暗になるが、目が慣れると月光がベッド全体を照らしてくれる。

リリーはとても暖かく、そして柔らかい愛斗の体に自分の腕を絡ませ、静かに眠りに落ちた。

2話　この二人をどうにかしないと・・・（後書き）

ご意見、ご感想、ご要望がありましたどうぞ。

3話　真意は理解するのもされるのも大変（前書き）

後書きにキャラ対談？を始めました。ずっとやりたかったんですよ。

3話　真意は理解するのもされるのも大変

「おい、ロラン。何考えてんだよ」
ロランはセドリックの声とイヴォンの視線で我に返った。
「何だ？」
「元気ないぜ、何かあったのか？」
イヴォンがそう言うと、突然後頭部に衝撃が走った。
「そうや！元気ないと損するで！」
「誰だよ！」
ロランが振り返ると、そこには一人の少女が笑みを浮かべて立っていた。
「君は・・・鳳凰院絢さんだっけ？」
「そうや、ウチは元気ない奴見とると、どつきたくなるんや」
「で、何かあったのか？ロラン」
ロランは映画のチケット二人分を取り出し、机に置いた。
「映画のチケット？それがどうした？」
「実はな、今日カミーユとデートなんだ」
イヴォンが思い切り舌打ちをした。
「デートかよ！はいはい、どうせ俺には縁の無い事ですよ」
「で、それがどうした？」
セドリックは悪態をつくイヴォンを無視して尋ねた。
「いや、最近さ、何か気まずくてさ・・・」
絢はロランの背中を思い切り叩いた。
「なんや？そんな事だったんか。なら話は簡単や。気持ちをぶつけたらええねん」
「そうだぜ。自分の思うようにやってみろよ」
ロランも頷いた。
「そうだな・・・でも他の奴の意見も聞きたいな」
丁度、そこに何時ものようにリリーを抱きかかえた愛斗が教室に

入ってきた。一人の少女が愛斗に気づき、叫び声を上げた。
「愛斗さま！」
少女は愛斗に抱きついた。
「浅代！昨日は何故、来なかったんだ？」
「ちょっと急用が出来てしまったんです。愛斗さまと一緒に学校に通えるなんて夢見たいです」
そんな愛斗をロランが恨めしげに見つめた。
「愛斗は相変わらずモテるな」
イヴォンも同意を示す。
「あいつ、顔がいいからな」
「俺、愛斗にも聞いてくるわ。あいつも年下と親しいだろ？」
ロランは映画のチケットをポケットに詰め、愛斗に向かって歩き出した。
「よう、愛斗。お前に尋ねたい事があるんだけど」
リリーを椅子に座らせた愛斗が顔を上げた。
「何だ、言ってみろ？」
「いや、デートのコツを教えて欲しいんだ」
「簡単だ。相手を気遣えばいい。それで後は好きにしろ」
ロランは分かったようで分からない気分になった。愛斗はリリーと話し始めた。
ロランは小さな声で尋ねた。
「あの・・・キスまでどう持ち込めば・・・」
ロランはある光景を見て言葉を失った。愛斗がリリーの頬にキスをしたからだ。
「ちょ・・・ここ教室ですけど？」
愛斗はロランに向き直る。
「ロラン、別に場所は関係ない。大事なのはそこに愛情があるかだ」
ロランは頷いた。
「分かった。俺も頑張るぜ」

夕方。
ロランは映画館の前でカミーユを待っていた。
「ロラン」
名前を呼ばれ、そちらを向くとカミーユが丁度、ロランに向かって歩いてきた。
「よぉ、カミーユ。可愛い服だな」
カミーユの服は可愛らしいピンクで白いフリルのついたスカートに白いワイシャツを着ていた。
「ありがとう、ロラン」
ロランは心の中で微笑んだ。中々いい出だしじゃないか？
「じゃあ、チケットもあるし入ろうか」
「うん」
カミーユは割と無口な方だったが、逆にそこがロランの好みだった。五月蝿い女と違って傍にいるだけで癒されてしまう。
映画館の受付は少し冷房が効いている。まだ春先だが、やはり日中は汗をかく。チケットを受付の女性に見せ、シアターに入る。右手にはレギュラーサイズのポップコーンとエルサイズのコーラが握られている。カミーユは何も買わなかった。
「Hの三番か・・・あったあった、ここだよカミーユ」
二人は隣同士の席に座る。沈黙・・・気まずい雰囲気。その時、マナーモードの携帯電話が着信を告げた。愛斗からだ。
「ロランへ、映画館で隣同士で座ったら手を握れ」
ロランはほくそえむ。何とタイムリーなメールだろうか。
「映画、始まったな」
ロランは呟き、カミーユの右手に自分の左手を伸ばす。後七センチ・・・。
もう少しのところでカミーユはロランのポップコーンに右手を伸ばし、ロランの左手は虚空を掴んだだけだ。
「もう少し・・・」
ロランは小声で呟き、カミーユの右手に何度も挑んだが悉く失敗

した。
二人の見ている映画は「真夜中の少女」というタイトルの取り留めの無いホラー映画だった。
暗闇の中、携帯電話が震える。
「ロランへ、お前の趣味から予想して、ホラー映画を見ているのだろう。カミーユが怖がる素振りを見せたり、お前の腕を掴んできたら、そっと肩を抱くんだ」
ロランは見ている映画の主人公に負けず劣らず、背中に肌寒さを覚えた。愛斗の頭脳は天才級だ。
ロランはじっとチャンスを待つ。しかし、カミーユはロランのポップコーンを上品に食べながら、無表情でスクリーンを眺めている。結局、チャンスはやってこなかった。
シアターを出た二人は映画館を後にした。辺りは暗くなっている。お約束のように携帯電話が震える。
「ロランへ、映画館を出たら次はレストランだ。食事で上手くムードを盛り上げろ。店の場所も指定する。東湾埠頭沿いの国道にあるレストランだ。しっかりやれ」
ロランは唸る。何故、映画の終わるタイミングまで予想出来るのだろう。

「愛斗さん？さっきから携帯電話ばかり弄ってますけど何してるんですか？」
リリーは机で日記をつけながら愛斗に尋ねた。
「ちょっとした人助けだ。心配しなくていい」
リリーは少し首を傾げたが、再び日記に視線を戻した。
愛斗は携帯をしまい、椅子に座りなおした。

ロランはタクシーでレストランにたどり着いた。もちろん料金はロランが払う。
「ここがレストラン？随分と洒落た所ね」

ロランは店を見て、頷いた。
「そうだ。さあ、中に入ろう」
ロランがカミーユを先導し、店の扉を開ける。直ぐに店員がやって来た。
「お名前をどうぞ」
「ロラン・ギヌメールです。こっちは連れのカミーユ・ドルゴポロフ」
店員は名簿を確認した。
「はい、ご予約してある席へどうぞ」
ロランは首を傾げた。予約をした覚えは無いが・・・。

「今は便利だな」
突然の愛斗の呟きにリリーが反応した。
「何がですか？」
「今は携帯一つで店の予約が取れる。いちいち電話をする必要は無い訳だ」
リリーも頷く。
「確かに通販とかは便利ですよね」
「あぁ、他にも携帯で支払いも出来るし、天気予報、ねずみがいる某有名遊園地のアトラクションの待ち時間も分かる。時代は進化したな」
そう言い、二人は笑いあった。

その頃ロランは東京湾と夜景が見える特等席で二人向かい合っていた。ウェイトレスが魚料理を二人の前に置いた。
「前菜のサーモンのマリネ白ねぎ和えです」
「上手そうだな。この店を選んだのは正解だったみたいだな」
実際にチョイスしたのは愛斗だが・・・。ロランは料理を口に運び、感想を漏らした。
「うん、口で蕩ける味わい。最高の一品だな」

カミーユも料理を口に運び、頷いた。
「ロランの感想のセンスは美味しくないけど、この料理は美味しい」
ロランは言葉を失い、黙り込む。カミーユのツッコミのセンスは一級のようだ。
その後も食事は進むが、ロランのムード作りは進まない。何か言えばカミーユの冷静なツッコミで上手くかわされる。
結局、何一つ作れないまま食事は終わってしまった。店を出た二人はその雰囲気のまま、桟橋を散歩し始めた。また携帯が震える。
「ロランへ、今ごろ海辺を散歩しているのだろう。後は一気に行け」
ロランは桟橋の中央付近で意を決した。
「あの、カミーユ？」
「ロラン」
声が重なる。
「何、カミーユ？」
カミーユはロランに一歩近づいた。
「もっとはっきりすれば？余計なムード作りなんて必要ないと思う」
「え？」
どうやらロランの地味な作戦は全てばれていた様だ。
「分かってたの？」
「当たり前。態度で分かる」
ロランは下を向き、項垂れた。
「俺、あまり空気読めないし・・・」
カミーユはロランの肩を優しく掴んだ。
「ロランはそのままが一番いい。素直に不器用でもいいから気持ちを素直に伝えてくれればいいから」
ロランの目が輝く。
「じゃあ・・・いいかな？」
ロランはカミーユの肩をしっかりと、でも優しく掴み、自分の唇をカミーユの唇に近づけた。
後、七センチの所でカミーユの人差し指がロランの額に触れた。

そして、押し戻される。
「えっ？」
「今日はお預け」
カミーユはそう言い、ロランの頬にキスをした。
「じゃあ、また明日」
カミーユはそう言うと、走っていった。
「何だよ・・・・」
その時ロランは悟った。
「そうか・・・愛斗はこの事を俺に伝えたくて・・・・」
ロランは愛斗がこの事を予想してメールを送っていた、そう思った。
「愛斗・・・ありがとう・・・・」
もちろんロランはその勘違いに気づく事は無かった。

3話　真意は理解するのもされるのも大変（後書き）

識神秀人（以下、秀）「皆さん、こんにちわ！もしくはこんばんわ！司会の秀人です」

南風渚（以下、渚）「同じく南風渚です！」

秀「でも、何をやるの？」

渚「はい、いい質問だね。やる事はキャラインタビューです」

秀人、書類を読む。

秀「なるほど、よく分かった。それでは・・・」

秀&渚「本日のゲストはこの方です！」

イヴォン（以下、イ）「こんにちわ・・・これ何の番組？」

秀「インタビューコーナーです。じゃあイヴォン、そこに座って」

イ「これでいいのか？」

渚「はい、ではまずQ&Aコーナーです！最初の質問を秀人君どうぞ」

秀「うん、じゃあ愛斗との出会いは？」

イ「う～ん、まあ愛斗と会ったのは俺が中1の時だな。愛斗はクラスでもモテたから羨ましいな～、ってずっと思ってたな」

秀「なるほど、それからどうして今の関係に？」

イ「それは愛斗が俺に生活費を稼ぐ方法を何でもいいから教えろ、って言ってきたからさ」

渚「それで教えたの？」

イ「まあ・・・」

秀「どんな方法？」

イ「ま、基本的に博打だな。俺が愛斗に教えたら愛斗の奴、直ぐに覚えてマスターしやがったからな」

渚「それで？」

イ「そしたら今度はカジノに連れて行け、とか言い出したから親戚のカジノに連れて行ったさ」

秀「もしかして・・・」

イ「ああ、親戚の店で代打ちとかやらしてたら、あっという間に客から金を巻き上げるからさ・・・」

渚「どれくらい？」

イ「いい時は一日ウン十万円だな」

秀「そんなに！？」

イ「ああ、恐ろしい奴だぜ」

渚「そうなんだ・・・では次の質問です。彼女はいますか？」

イ「い、いる訳ねぇだろ！」

秀「ですよね～」

イ「テメェ、ナメてんのか！？ふざけんな！」

渚「（あれ？不思議とキャラが変わったような・・・）」

秀「お、落ち着いて！」

イ「俺の前で女の話をするんじゃねぇよ！許せねぇ！」

秀「う、うわぁ！」

渚「えっと、イヴォン君が錯乱し始めたので今日はここまで」

秀「渚！助けて！イヴォンが・・・ギャッ！」

イ「もう一発殴らせろ！」

渚「（今後は触れないようにしよ・・・）」

おしまい

キャラ紹介　生徒名簿！（前書き）

キャラ紹介です。さらに詳しく見たい方は本編のキャラ紹介をご覧下さい。

キャラ紹介　生徒名簿！

識神（しきがみ）　秀人（しゅうと）
誕生日：５月２日
詳細：黒髪に緑の瞳を持つ。運動神経のいい普通の少年。成績はそこそこ、顔もまあまあといった所の無難な人物である。正義感だけは人一倍強い。困っている人は助けるのがモットー。同じクラスのクローディヌに恋心を抱いている。

澪坂（みおさか）　愛斗（あいと）
誕生日：８月７日
詳細：黒い髪に漆黒の瞳を持つ。とても頭が切れ、容姿端麗、少し捻くれた性格の持ち主。リリーを溺愛していて、常に傍にいて、朝はお姫様抱っこで教室に入ってくる。本人は否定しているが時々、ロリコンに見られるときがある。お屋敷に二人で住んでいて、寝る時もご飯も一緒。どうやら二人がお揃いで身に付けているロケット（リリーは金、愛斗が銀）には不思議な力があり、リリーが身の危険を感じると愛斗の左目にリリーの光景が映るようになる。

南風（みかぜ）　渚（なぎさ）
誕生日：６月２１日
詳細：優しくて真面目で、でも洒落も分かるいい人。クラスでの信頼も高く、愛斗の全てを認めている。愛斗に対してはフレンドリーに接する。アルマや香奈のようなタイプは苦手らしい。

リリー・ケンプフェル
誕生日：１１月２８日
詳細：戦争で大怪我を負い、愛斗が保護中の少女。普段は愛斗に抱きかかえられながら登校。実はしっかりしている。愛斗がいないと

生きていけないように周りから見られる事もあるが実はその逆。リリー無しでは愛斗が生きていけない。性格は温厚で優しく、回りを癒す存在である。愛斗にだけは特別な感情を抱いていて、愛斗とは一心同体。

ロラン・ギヌメール
誕生日：５月２３日
詳細：愛斗の友達。彼女は同じクラスのカミーユで、第二のロリコンと呼ばれている。性格は明るく、誰とでも仲良く接するが口下手な面もあり、女性の前では言葉が出てこなくなる。

セドリック・シャバンヌ
誕生日：７月４日
詳細：ロランと同じく愛斗の友達。性格も明るく問題は無いが、少し怖がりな面もあり、幽霊や怖い話などは苦手である。

アルヴィ・ラーファエル
誕生日：４月２３日
詳細：愛斗の友達。小柄で大人しい少年。趣味は機械弄りで授業中も機械を分解したりして研究している。愛斗の携帯も彼が改造したものであり、発明品を愛斗達に見せて自慢する一面もある。

イヴォン・フックス
誕生日：１０月３日
詳細：愛斗の友達。博打や麻雀などその手のものは得意で、愛斗に博打を教えたのも彼である。性格は明るく気さくで、誰とでも仲良くする。変態な一面もある。

木下（きのした）　亜麻音（あまね）
誕生日：６月１３日

詳細：クラスの風紀委員みたいな人。校則違反を見つけると見境無く攻撃する。愛斗の事は顔だけ認めている。性格に関しては最低レベルらしい。リリーと愛斗の関係を問題行動視している。

浅代（あさしろ）　カノン
誕生日：2月4日
詳細：愛斗の友達。愛斗に絶対的な忠誠心と尊敬の気持ちを持っている。愛斗がする事には何時も賛成し、愛斗を本気でサポートする。愛斗の事を愛斗さまと呼ぶ。

クローディヌ・ケ・デルブロワ
誕生日：12月23日
詳細：秀人と両思いの少女。愛斗は苦手で、避けている。恥ずかしがり屋の部分もあり、秀人とのデートでは何時も何も言えない。

アルマ・ベルンシュタイン
誕生日：3月18日
詳細：いわゆるお嬢様で学校でも気高く留まっている。愛斗は好きでは無いが嫌いでも無いらしい。秀人に助言をしたりもする。

花寺（はなでら）　香奈（かな）
誕生日：6月7日
詳細：美しい容姿でアルマと同じく気高く留まっている。愛斗の能力やリリーに対する感情も認めている。一途なリリーと親しい。

ジェラルド・カーペンダー
誕生日：5月27日
詳細：一言で言うと不良である。携帯電話で授業中もメールをしている。愛斗達とは仲がいい。（特に秀人）
愛斗をライバル視する時もある。

鳳凰院（ほうおういん）　絢（あや）
誕生日：４月１２日
詳細：関西人で常にマイハリセンを所持している。好きな食べ物はたこ焼き。性格は明るくお笑い好きで冗談も分かる。愛斗は面白い奴だという認識がある。

柏（かしわ）　カリーヌ
誕生日：９月３０日
詳細：シルヴェストルの双子の妹。愛斗とは知り合いで仲がいい。愛斗の事はかっこいい人の認識がある。愛斗のやる事はカノンと同じく、従う。

柏（かしわ）　シルヴェストル
誕生日：９月３０日
詳細：カリーヌの双子の兄。性格は遠慮深く、あまりでしゃばらない。愛斗にはカリーヌの事を任せている。頼りのある兄分として愛斗を認めている。秀人には本当にいい人の印象を持っている。

カミーユ・ドルゴポロフ
誕生日：７月１２日
詳細：結構無口な少女。ロランとはとても仲がいい。ロランとじゃ釣り合いが悪い、とよくアルマに言われるが口下手で不器用なロランがカミーユにとっえてはいいらしい。愛斗とは過去に面識あり。

キャラ紹介　生徒名簿！（後書き）

ご意見・ご感想・ご要望などありましたらどうぞ。

4話　親衛隊結成！（前書き）

えーと、久しぶりの更新ですね。これからはあまり間を空けないように頑張りますのでよろしくお願いします。ではどうぞ～☆

4話　親衛隊結成！

入学から最初の金曜日の昼休み、リリーは課題のノートを提出するために職員室へと向かっていた。普段は一人で行かずに愛斗に連れていってもらうのだが、今は愛斗はいない。それにリハビリも兼ねて、壁に手をつきながら歩いて行く事にしたのだ。

「んん、疲れた」

リリーは階段の踊り場で疲れて座り込んだ。

そんなリリーを階段の上から見下ろす三人の男子生徒がいた。

「ユウさん。次のターゲットはあの子ですか？」

ユウさんと呼ばれた男子生徒はにやりと頷いた。

「お前ら、よく聞け。新入生は宝物の宝庫だ。俺がお手本を見せてやる」

「さすがっス！ユウさん！」

どうやら男子生徒三人はリリーをナンパするつもりらしい。ユウは踊り場で一休みするリリーに近づいた。リリーもそれに気づく。

「こんにちわ」

「やあ、どうしたの？大変そうだね。手伝おうか？ほら、肩を貸すよ」

リリーはとてもありがたかったが断った。

「お気持ちだけで十分です。リハビリも兼ねているので」

ユウは少し悲しそうな顔をした。

「そうですか、では後で一緒に食事でも？もちろんお代は僕が」

リリーは少し迷った。少し顔を赤らめる。

「ええと、じゃあ少しだけなら・・・」

リリーがそう言った時だった。ユウは飛び蹴りを喰らい吹っ飛んだ。

「ぐわっ！」

壁に叩きつけられたユウは相手を睨んだ。その相手は愛斗だ。

「おい、貴様。誰に手を出している」
「何だと！お前こそいきなり何だ！」
愛斗はリリーを抱きかかえ、ユウを睨みつけた。
「今日は見逃してやるが次は無い。覚えておけ」
愛斗の冷静で凄味の入った声にユウは怖気づき、脱兎のごとく逃げていった。
愛斗はリリーの顔を笑顔で見つめた。
「リリー、怪我は無いか？職員室まで行くのなら俺に言ってくれ」
「でも、何時までもそうしているとリハビリが・・・」
「無理してリハビリなんてする必要なんて無いぞ。無理して今の様な奴に絡まれたらどうする？」
リリーは口篭った。
「じゃあ・・・お願いします」
「任せろ」
愛斗はリリーを抱え、歩き出した。

「では話し合いを始めたいと思います。議題がある人は提案してください」
亜麻音がクラス全員を見回す。普段は議題は出てこないのだが今日は違った。
愛斗が手を挙げたからだ。
「では愛斗くん、どうぞ」
愛斗は立ち上がり、教卓に立った。
「俺が提案する議題は「リリー親衛隊」の結成についてだ」
全員が呆けた顔をする。
「いきなり何だよ？愛斗」
イヴォンが笑い出した。
「笑い事では無い！」
愛斗は事情説明を始めた。
「今日の昼休み、リリーが上級生に絡まれるという許しがたい事件

が発生した。これによりリリーには護衛が必要と感じた」
「それは愛斗じゃ駄目なの？」
秀人が最もな質問をした。
「俺も四六時中、何時でも傍にいるのは不可能だ。もちろん最善は尽くしているが」
リリーは少し困った顔をした。
「愛斗さん、私は平気ですよ」
「いや、リリー。お前に何かあってからでは遅いんだ」
イヴォンがため息をつく。
「要するにファンクラブだろ・・・」
「ファンクラブでは無い。親衛隊だ」
愛斗は教卓を勢いよく叩いた。
「さあ！我と思う者は手を挙げろ！」
沈黙。
亜麻音がパンパンと手を叩く。
「はい、却下ね。第一、不純だわ。ファンクラブなんて・・・」
「親衛隊だ！」
「じゃあ皆さんに聞いてみましょう。その馬鹿げた親衛隊に参加する人がいるのか」
亜麻音が全員に向き直った。愛斗もそれを習う。
「改めて言う。参加する勇気のある者はいるか？尚、俺は零番隊隊長として参加決定だ」
一人の少女が立ち上がる。カミーユだった。
「私は参加する。リリーが心配」
愛斗は頷き、参番隊隊長の所に名前を書きこんだ。
「まあ、カミーユが参加するんなら俺も」
ロランが立ち上がった。浅代も同じく立ち上がる。
「愛斗さまが先頭に立つのならお供しますわ！」
「俺もやりますよ」
セドリックも立ち上がった。

「皆さんが参加するのなら」
愛斗の友達であるアルヴィも立ち上がった。
「しゃあねぇな。俺もやるか」
イヴォンもだ。
「秀人もやるよな」
秀人も仕方なく頷く。
「分かったよ」
「なら私たちも」
立ち上がったのは双子の兄妹、カリーヌとシルヴェストルだ。
「なんや、賑やかになってきたな～」
絢が立ち上がる。愛斗は亜麻音を見た。
「親衛隊結成だな」
亜麻音は悔しそうに歯軋りしたが諦めた。
「仕方ないわね・・・認めるわ」
では、と愛斗が咳払いをした。
「これよりリリーからの挨拶がある。よく聞いてくれ」
全員が静まり返る。リリーが愛斗に支えられながら教卓に立った。
「ええと皆さん。私のためにここまでして下さってありがとうございます。何とお礼をしていいか分からないのですが、皆さんには心から感謝の気持ちを示したいと思います」
クラスが歓声に包まれた。一部を除いて・・・。
アルマが勢いよく立ち上がった。
「可笑しいわ！何でリリーなんかに親衛隊な訳？相応しいのは私よ」
「そうよ、澪坂愛斗のロリコン！」
「そうだ！」
一部の生徒が立ち上がり抗議し始めた。中にはクローディヌもいる。浅代が慌てた様子で愛斗に駆け寄った。
「愛斗さま、どうしますか？」
愛斗は立ち上がった生徒を指差した。
「親衛隊の名において取り押さえろ！」

その一言で親衛隊が襲い掛かった。反対派も応戦する。
「初日の恨みをはらさせてもらうわ！」
亜麻音が愛斗の後頭部に箒を叩き付けた。愛斗は自分の身よりリリーを庇った。
「リリー、逃げろ！俺が足止めする」
愛斗はチョークの粉をぶちまけた。回りが咽る。
教室は既に戦場と化していた。そこにオスカーが一喝した。
「うるさい！やめなさい！」
全員がその一言でピタリと止まる。
「君たちが喧嘩するのは構わないが他所でやってくれ！ここは教室だ」
全員が渋々と席につく。
いきなり、教室に泣き声が木霊した。泣いているのはリリーだ。
愛斗がリリーに駆け寄る。
「どうした、リリー？怪我したのか？」
「違います・・・私の事で皆さんが喧嘩をしてしまったなら私が悪いんです。私は・・・愛斗さんだけでいいんです！」
愛斗はリリーをしっかりと抱きしめた。
「すまないリリー。俺が間違っていた。喧嘩はよくないな」
リリーは愛斗に抱きつき、大声で泣き始めた。
教室の空気は気まずくなった。
「リリー、俺がいるから、大丈夫だ。泣かないでくれ」
愛斗が頭を撫でながら慰めるとようやく泣き止んだ。
ロランが拍手をした。
「やっぱ、愛斗とリリーは最高のペアだぜ。なあ、みんな？」
アルヴィが頷いた。
「そうですよ。親衛隊も必要ですけどやっぱり一番は愛斗さんがリリーさんを守ってあげることですよ」
全員が頷いた。愛斗も顔を上げて全員を見回した。
「みんな、ありがとう。リリーにはやはり笑顔が似合ってるな」

「ありがとうございます」
教室の真ん中で愛斗はリリーの額にキスをした。
他の者はただ照れるだけであった。

4話　親衛隊結成！（後書き）

秀「はい、二回目です。前回は酷い目に遭いましたが、今回も頑張りたいと思います！」

渚「同じく頑張りま～す！」

秀「じゃあ今回のゲストはこの方です！」

ロラン（以下、ロ）「俺が二回目なのか？」

渚「その通り。まあ座って」

秀「では質問です。彼女はいますか？」

ロ「その質問、前回と同じじゃないか？」

秀「まあそうですね」

ロ「お前はそれで前回酷い目に遭ってるだろ？」

秀「はい。で、どうなんですか？」

ロ「どうも何も1話でいるって言ったし、3話でもその話やっただろ？」

渚「（ロラン君、鋭いわね・・・）」

秀「ではいるんですね？」

ロ「まあ、カミーユがいるしな・・・」

渚「何か進展は？」

ロ「特に無いな」

秀「でも3話でキスされてたような・・・」

ロ「あれは特別だ。別に唇にじゃないし・・・」

渚「一日に何回位キスしてるの？」

ロ「ちょｗｗ、そんな何回って！俺は何処かのロリコンとは違うんだぜ」

愛斗（以下、愛）「誰がロリコンだ？」

ロ「うわっ！出た！」

秀「あっ、愛斗」

渚「愛くん、どうしたの？いきなり出てきて」

愛「お前らに言っておくが俺はリリーをそんな目で見たことは一度も無い」

秀「（別にその話はしてないんだけどね・・・）」

ロ「嘘つくな！一日に何回キスしてるんだよ！しかも教室で・・・」

愛「あれはそう言う意味ではなく、只のスキンシップだ」

秀「へぇ～（何故だろう。信用できない）」

渚「まあ、愛くんとリリーちゃんは一心同体だもんね」

愛「そう言うことだ」

ロ「あの俺のコーナーじゃなかったの？」

秀「そうでしたね。では時間がなくなったのでまた次の機会に」

ロ「は！？愛斗が言い訳して終わりじゃねぇか！」

渚「次回もお楽しみに！」

ロ「待て！俺の出番は？」

愛「来週は出番ないぞ」

ロ「そんな・・・」

おしまい

5話　先生、バナナはおやつに入りますか？（前書き）

今回は遠足です。バスと言えばみんな歌ってますけど、最近はバスにカラオケの機械が付いているみたいです。便利ですね～。それではどうぞ～☆

5話　先生、バナナはおやつに入りますか？

「これから明後日の学年遠足の班決めをしたいと思います。決め方の説明をこれからオスカー先生にしてもらうので皆さん静かに」
亜麻音が相変わらずの真面目な態度で全員に言った
「えー、別に特に決まりは無いが、基本的に男女混合だ。亜麻音さんの指示に従うように」
「はい、ありがとうございました。それでは公平にという事で機械的に決めたいと思います」
亜麻音は名簿をペラペラと捲った。
「まず一班は秀人君、クローディヌさん、リリーさん、ロラン君。二班はカミーユさん、アルマさん、セドリック君、イヴォン君。三班は私と香奈さん、ジェラルド君、シルヴェストル君です。四判、愛斗君、渚さん、カリーヌさん、アルヴィさん。五班はアルマさん・・・」
「ふざけるな！」
愛斗の叫び声が教室に響いた。視線が愛斗に集まる。
「俺とリリーが別々だと？決めなおせ！」
それに便乗したのか、ロランも立ち上がった。
「俺もカミーユと一緒がいいぞ！」
ざわめく教室を尻目にして、秀人は教室の窓の外を眺めていた。
亜麻音が二人を両手で抑止する。
「はい、この決定に変更はありません」
「俺とリリーは二人で一つだ。裂く事は出来ない」
愛斗を無視して班決めは進んでいく。今回ばかりは親衛隊も動けないようだ。
「ではこの班で遠足に出発します。尚、おやつは三百円までです」
愛斗が恨みを込めて呟く。
「ふざけるなリリーと引き裂かれておやつは三百円までだと俺は認

めないぞ絶対に絶対に認めないぞ大体・・・」
愛斗の呪文のような呟きを聞いてアルヴィが宥めた。
「愛斗さん、大丈夫ですよ。愛斗さんとリリーさんは離れていても心は一つですから」
尚も不満そうな顔をしていた愛斗だったが、仕方なく我慢したようだ。

その夜、愛斗は大きな居間のソファーに座り、ある作業をしていた。
それを不思議そうに見つめるリリーが居た。
「愛斗さん、帰って来てからずっとその作業していますけど何しているんですか？」
愛斗はリリーを笑顔で見つめ返した。
「完成するまで待っていてくれ」
小一時間後、愛斗が腰を浮かせた。
「出来たぞ・・・」
愛斗はリリーの後ろに立ち、リリーの首に暖かい布を巻きつけた。
「これは？」
「明後日の遠足に備えてのマフラーだ。暖かいだろう？」
リリーはマフラーの感触を味わう様に顔を埋めた。
「ありがとうございます。大事にしますね」
愛斗はリリーの笑顔を見て、満足そうに玄関へと向かった。
「どちらへ？」
「イヴォンとの約束があるんだ。十時までには帰って来るからな」
愛斗はそれだけ言うと出かけた。
リリーはマフラーを枕の様にして頭を乗せ、心地よさそうな寝息を立て始めた。

そして遠足当日。
「はい、皆さん。一列にバスに乗ってください」

亜麻音が厳しい声で全員に指示を出す。遠足は私服でオーケーなので全員が違う服を着ている。
秀人は黒いシャツの上に赤いパーカーを着ていた。あまりファッションについては気にかけない秀人なりに着飾って来たつもりだ。
愛斗は灰色のシャツに黒いワイシャツ、黒いズボンでチェーンがポケットから出ている中々イカした服装だ。
「イヴォンは？」
秀人が愛斗に尋ねた。
「あいつなら車酔いに備えて酔い止めでも飲んでるだろう」
愛斗があっさりと言うと、イヴォンが戻ってきた。
「俺・・・バス嫌いなんだよ・・・見ただけで吐き気がする・・・」
「諦めろ。ほんの二時間程度だ」
愛斗がイヴォンの肩を叩く。愛斗はリリーを抱え、バスの一番後ろの席に座った。窓側に愛斗、その隣にリリー、その隣には秀人が座り、続いてアルヴィだ。イヴォンはもちろん一番前だ。
「みんな！バスと言えば？」
渚がバスガイドからマイクを強奪し、元気よく喋っている。ロランが一緒になって叫んだ。
「カラオケしようぜ！」
「そう！みんなで歌いましょう～！」
前方の席から歓声が上がる。
「カラオケか・・・どうしよう。ねえ愛斗？」
秀人が愛斗を見ると、既にリリーと愛斗は二人きりの世界に入っていってしまっている。
秀人の耳には嫌でも二人の会話が入ってくる。
「リリー、酔ったら直ぐに言ってくれ。後、お菓子も沢山持ってきたからな」
「愛斗さん、大丈夫ですよ。それよりカラオケに興味があります」
愛斗が頷いて、渚を呼んだ。
「渚！マイクをくれ。リリーが歌いたいそうだ」

「分かったわ」
渚が頷き、リリーにマイクを手渡した。リリーが座ったままで喋った。
「では張り切って歌いたいと思います。聞いてください、曲は「ハレ晴れユカイ」です」
その声の可愛らしさに全員がどよめいた。
「ナゾナゾ～♪みたいに～♪地球～儀を～解き明かしたら～♪・・・・」
気付くと全員が手拍子を打っていた。愛斗も聞き惚れている。そしてサビで興奮は最高潮に達した。
「アル～晴レ～タ日～ノ事～♪魔法以上のユ～カイが♪・・・」
そして興奮を保ったまま最後のフィナーレに突入する。
「走り～出すよ～♪後ろ～の人も～♪おいでよ、ドキ、ドキッするでしょう♪」
拍手の嵐、イヴォンだけは座席に倒れて目隠しをして死んでいるが・・・。
歌い終わったリリーを愛斗が強く抱き締めた。
「リリー、よく頑張ったな」
「はい」
リリーも嬉しそうに笑う。
「次は俺だ！」
ロランが勢いよく立ち上がった。
「頑張って」
カミーユがロランをさり気無く励ました。
「行くぜ！曲はオレンジレンジでＯ２だ！」
直ぐにセドリックが怒鳴った。
「止めろ！お前の歌唱力じゃ無理だ！」
アルヴィも叫ぶ。
「そうです！ロランさんは何時もカラオケでその歌、歌って五十点以上出した事ないじゃないですか！」

「そうだ、止めておけ」
愛斗も頷く。カミーユが耳栓をさり気無くしたのを秀人は見逃さなかった。
「うるせぇ！行くぜ！」
そして地獄が始まった。

5話　先生、バナナはおやつに入りますか？（後書き）

秀「えっーと、今回は酷いですね・・・」

渚「何が？」

秀「いや、ロランの歌声が」

渚「どんな声帯をしているのかが気になるわ」

秀「えっと、アルヴィからの情報によると酷いのはあの歌だけで、他の歌はそこそこだって・・・」

渚「じゃあ何であれを歌ったのかしら？」

秀「好きだから・・・かな？」

渚「好きこそ物の上手なれ、は嘘ね」

秀「上手い事言うね」

渚「それよりも今回はリリーちゃんの歌声が聞けたわね」

秀「上手かったね・・・」

愛「当たり前だ！」

秀&渚「うわっ！またいきなり！」

愛「リリーの歌声は本物だ・・・うん」

秀「何だかご機嫌だね」

愛「当然だ。リリーの歌声が聞けただけで、もう俺は満足だ」

渚「でも余韻が台無しね・・・」

愛「ロランはやはり空気を読めない奴だった・・・」

秀「あそこで絶叫だからね～」

渚「音程が取れていない、とかのレベルじゃ無かったわね」

愛「只の絶叫パレードだ。あいつの自己満足で終わったな」

秀「でもまだ遠足はこれからだよ」

渚「次回は微エロです！」

愛「そうなのか？」

秀&渚（意味ありげに笑う）

愛「おい、何だ。もしかしたら・・・」

秀「詳しくは次回をお楽しみに！」

渚「それではさよなら～☆」

おしまい

６話　酔うと人は何をするか分からない（前書き）

お待たせいたしました～。６話目です。
今回は遠足編後半、微エロ？ですよ。（エロは人の解釈による）
それではどうぞ～☆

6話　酔うと人は何をするか分からない

遠足の目的地は都内から二時間程で着く湿原だ。その湿原は自然公園で遠足にはもってこいの場所だった。
駐車場にバスがゆっくりと入り、止まった。その途端にバスからは人が雪崩の様に溢れ出た。
「畜生！ロランめ！」
セドリックが叫ぶ。
「ホントですよ・・・」
「全く同感だな」
リリーを車椅子に乗せ、愛斗が耳を穿り、首を回した。イヴォンは青い顔をして唸っている。
「ロランの奴・・・後で殺す・・・そして吐きかけてやる・・・」
渚やアルマと香奈、クローディヌ、カノンやカリーヌもげっそりもしている。当の本人は満足そうに恍惚の表情を浮かべている。
「歌を歌うっていいな！ジェラルド！」
「うるせぇ！お前のせいで鼓膜が変になっちまった！」
ロランと言う名の音響兵器は気にせずに笑いながら駆け出していった。その背中を恨めしそうに全員が睨む。
「はい、皆さん。整列してください。これから班ごとに自由散策の時間です」
全員が班に分かれ始める。愛斗はリリーの手を握って離そうとしない。
「リリー、今ならまだ間に合う。俺と一緒に行かないか？」
「大丈夫です。寂しいですけど・・・私は耐えて見せます！」
「リリー、お前はもう立派だな・・・」
そう言い、愛斗とリリーは抱き合う。
班がそれぞれ出発しても二人はまだ見詰め合っている。
「やはり・・・」

そう言い、リリーの方に歩き出した愛斗を渚が抑止する。
「愛くんはこっちよ」
よって秀人がリリーの車椅子を押す形となった。
「リリー、そのマフラーは？」
「これは愛斗さんに編んで貰ったんです」
秀人はそのマフラーにリリーの名前が編みこんであるのを見つけた。
「あのロリコンが・・・」
ロランが呟いた。
「全くね。あいつは変態の塊よ！」
二人がぼろくそ言っているのを尻目に秀人はリリーを見た。見れば見るほど可愛らしく見える。
おっと、いかんいかん。こんな目でリリーを見たら愛斗に殺される。でもリリーに好きな人が出来たら愛斗はどうするんだろう？自殺するんじゃ？いや、相手を殺すかも・・・。
秀人が色々な想像を膨らませているとリリーが秀人を見た。
「秀人さん？考え事ですか？」
「あ、いや、何でもないよ」
リリーが周りを見回した。
「それより秀人さん？霧が濃くなってきていません？」
秀人があたりを見回した。確かに白い霧に覆われた湿原は少しの恐怖を感じる。
「確かに・・・」
その時、黒い物体が草むらから飛び出した。
「きゃっ！」
リリーが叫ぶ。その声は湿原に木霊した。
「リリー！」
愛斗が霧に向かって突然叫ぶ。
「どうしたの？」

渚が愛斗を振り返った。
「リリーの悲鳴が聞こえた。俺は行く！」
愛斗は湿原の霧に消えていった。
「ちょっ、愛くん！」
「僕が追いかけますよ」
アルヴィが愛斗の消えた方向に走り出した。
「頼んだわよ！」

リリーが驚いて車椅子から転げ落ちた。
「リリー！」
秀人が叫んで、駆け寄った。飛び出てきた黒い物体は・・・。
「狐？」
そう、秀人が素っ頓狂な声を上げた。
「びっくりしました・・・」
リリーが必死に車椅子に戻ろうとしている。秀人はリリーを車椅子に優しく乗せた。
「でも可愛いな・・・」
リリーが狐の背中を撫でた。
「いい子ですね。帰り道が分からなくなってしまったの？」
狐がキューと一声鳴いた。ロランの叫び声が響く。
「わぁ！」
ロランがバランスを崩して、湿原に倒れこんだ。
「ロラン！」
ロランは返事を返さない。か細い声が聞こえてきた。
「助けてくれ・・・」
ロランの腕が湿地から出て来た。
「無事か？」
「まあな・・・」
ロランが湿地から這い出てきた。汚れは少ないが、顔はドロドロに汚れている。きっと顔から落ちたのだろう。

「リリー！」
愛斗が湿地の中から姿を現した。
「愛斗？何でここに？」
「リリーの悲鳴が聞こえたから飛んできた」
ロランが機嫌の悪い声で呟いた。
「何だよ・・・結局只のロリコンじゃねえか」
その一言が愛斗を刺激したらしい。愛斗の拳がロランの腹にめり込む。
「がっ！」
その後、ロランの悲鳴が湿原に木霊した。

「愛斗さん、何処に行ったんだろうな？」
アルヴィは一人湿原を彷徨っていた。アルヴィが全員と合流出来たのは一時間後の事だった。

霧が晴れた湿原の一角で全員は昼食をとることにした。それぞれが敷物を広げ、友達繋げて仲良く食べている。リリーはもちろん愛斗と一緒だ。周りには親衛隊もいる。
「リリー、チョコがあるぞ。ポテトチップスの方がいいか？それともこっちのクッキーがいいか？」
相変わらずの愛斗だがリリーもそれに素直に応じている。
「愛斗さん、気が早いですよ。まだお弁当食べていないんです。折角、愛斗さんが作ってくれたお弁当なんですから美味しく食べたいです」
愛斗はリュックからピンクの風呂敷に包まれた弁当箱を取り出した。それをリリーに手渡す。
「ほら、リリー。これがお前の分だ」
リリーが両手で丁寧に弁当を受け取った。
「ありがとうございます。愛斗さんの分は？」
愛斗は青い風呂敷に包まれたリリーのと同じサイズの弁当箱を出

した。
「開けてみてくれ」
愛斗がリリーに言うと、リリーは風呂敷を解いて蓋を開けた。
「凄いですね」
秀人とアルヴィ、ロランやイヴォン達親衛隊も覗き込む。
「派手だな・・・」
ロランが呟いた。
「これがキャラ弁と言う物ですかね？」
アルヴィの疑問に愛斗が答えた。
「そうだ、俺の手作り弁当だ。ちなみに・・・」
愛斗が自分の弁当箱も開けた。中身はリリーのと同じだ。
「わあ、愛斗さんとお揃いですね」
リリーが感嘆の声を上げる。
「でも、愛斗さん。飲み物は？」
リリーが愛斗の持ち物を見て言った。
「そうだ。忘れていたな。今買ってくるから待っていろ」
愛斗が立ち上がり、自販機へと向かった。
愛斗が見えなくなるとイヴォンがバッグから何かを取り出した。
「イヴォン、何だそれ？」
秀人が尋ねる。イヴォンの手にはビールのような液体が入ったペットボトルが握られていた。
「これはな、俺の親戚のカジノに来た奴が俺にくれたんだ。不思議な効能があるらしいぜ」
「それはどんな？」
アルヴィが首を傾げた。イヴォンが自信満々の顔で喋りだした。
「まあ基本は酒だな。直ぐに酔っ払って大変な事になるらしい。俺はこれから愛斗を使って実験したいと思う」
「面白そうだな」
愛斗に殴られた恨みが強いロランが賛同を示した。秀人達も少しなら、と頷く。

イヴォンが紙コップに液体を注ぎ、愛斗の前に置いた。
「後は待つだけだ」
秀人達は素知らぬ顔をして待ち始めた。
二分後、愛斗がジュースを両手に戻ってきた。
「リリー、お前が好きなコーラを買ってきたぞ」
愛斗がリリーにコーラを手渡し、自分の場所に座った。直ぐに紙コップに気付く。
「何だ？」
愛斗は少し疑う素振りを見せたが、気にせずに一気に飲み干した。
「ビールみたいな味だな・・・」
愛斗にまだ変化は無い。秀人達は更に見守った。
三十秒後、愛斗に変化が起きた。目が焦点を失い、後ろに倒れこんだ。
「愛斗さん！？」
リリーが愛斗の腕を掴み、揺さぶった。
「何だ？これだけか？」
ロランが残念そうに呟いた。しかし、イヴォンは首を横に振った。
「いや、まだ後一つ効果があるんだ」
「どんな？」
秀人が適当に質問しているとイヴォンがそれを遮った。
「まあ見てろ」
更に見守り、五秒後。愛斗がゆっくりと目を開けた。
「愛斗さん？大丈夫ですか？」
リリーが愛斗に優しく声をかけた。
「リリ～？」
明らかに呂律が回っていない。リリーが愛斗の異常に気付いた。
「愛斗さん、酔っ払っていません？」
リリーが尋ねると、愛斗がリリーを見つめた。次に愛斗が取った行動は・・・。
「リリ～！」

愛斗がいきなりリリーに抱きつき、押し倒した。
「きゃっ！愛斗さん！？」
リリーはいきなりの行為に抵抗出来ずにされるがままにされていた。
「リリ～！しゅきだ～！（好きだ～！）」
愛斗はそう叫び、リリーの頬にキスをした。
「にゃあ！止めてください！」
リリーが必死にばたつくも愛斗の腕力には抵抗出来ない。
「かあいい～！（可愛い～！）」
愛斗が更に叫びリリーの体を弄り始めた。
「ふにゃあああ！くすぐったいです！」
リリーは猫みたいに叫びながら、必死に抵抗している。周りの視線が集まってきた。
イヴォンが冷静に感想を述べた。
「これは中々官能的な絵面だな」
「そうだな」
そして遂には愛斗がリリーの服の中に手を伸ばした。
「にゃあ！そこは！にゃあ！」
リリーが叫ぶも愛斗の耳には届かない。愛斗がごそごそと服の中も弄り始めた。
「にゃっ！ひにゃ！ふにゃあああ！」
その艶かしい声にイヴォンが鼻血を噴き出して倒れた。
さすがの秀人とアルヴィも止めに入った。
「愛斗！もう止めろ！」
「そうです、愛斗さん！ここは公共の面前ですよ！せめて二人きりの時にして下さい！」
しかし、その声は愛斗に届かない。逆にアルヴィが愛斗の蹴りを鳩尾に喰らい、吹っ飛んだ。
「愛斗！もういいだろ！」
ロランも止めに入る。

「リリ～！」
愛斗がリリーの首筋を舐め始めた。
「にゃあああああああ！くしゅぐったい！」
「貴方達！何をしているんですか！」
亜麻音が腕を組みながら歩いてきた。秀人とロランやジェラルドが愛斗をやっとリリーから引き剥がした。
「いや、何でも無いですから！」
秀人が叫んだ。
リリーは仰向けに倒れて荒い息をしている。服は肌蹴ていて誰の目から見ても良くは見えない。
「リリ～！」
愛斗が秀人達を振り切り、リリーに圧し掛かった。
「にゃ！」
リリーがまた叫ぶ。その時だった。愛斗が急に力を失い、リリーの上に倒れこんだ。
「効果切れだ」
何時の間にか起き上がったイヴォンが呟く。
「愛斗・・・さん？」
愛斗はリリーの膝の上で寝息を立てている。
「貴方達！また破廉恥な！」
亜麻音がそう叫び、紙コップの中の液体を不意に飲み干した。
「あっ！」
全員が叫ぶ。亜麻音の顔が赤くなる。そして・・・。
「かっこいい！」
亜麻音は顔色を変えて寝息を立てている愛斗に飛び掛った。そして頬を摺り寄せる。
「綺麗なお顔！」
その騒ぎに愛斗が目を覚ました。
「ん・・・・！？」
自分に亜麻音が抱きついているのを見た愛斗がいきなり叫んだ。

「止めろ！お前・・・」
亜麻音が愛斗を更に撫で回す。
「止めろ！お前がそんな痴女だとは！」
再び視線が二人に集まる。
「なあイヴォン。止めなくて良いのか？」
「何、直ぐに効果が切れるさ」
イヴォンの予告通り、亜麻音は十分程で元に戻った。
「ん・・・！？」
亜麻音は自分のした事、周りの視線に気付いた。
「愛斗君！貴方は何て破廉恥な事を！」
いや、明らかに抱きついていたのは亜麻音の方だったが。とにかく愛斗は気絶していた。渚も神妙な顔をしている。
「亜麻音、幾らなんでも今のは・・・」
全員が軽蔑の視線を向ける。もちろん愛斗にもだ。
愛斗がふらふらと立ち上がった。
「何だ・・・」
愛斗が見た光景は顔を赤くしているリリーの姿だ。
「そうよ！この飲み物を飲んだら変になって・・・」
亜麻音が思い出した事を叫んだ。愛斗も頷く。
「俺もだ」
秀人がばつの悪そうに呟いた。
「あの・・・それはイヴォンが実験で用意した液体で・・・」
秀人とアルヴィによる状況説明が始まった。
「という事はイヴォンが悪いんだな？」
「イヴォン君がいけないのね？」
秀人が頷く。愛斗と亜麻音が座っているイヴォンを見つめた。亜麻音が蝙蝠傘を取り出した。
「湿地の天気は変わりやすいのよね～。傘を持ってきて正解だったわ。いろんな意味で」
亜麻音が傘を殴りやすいように握った。愛斗も拳の関節を鳴らし

ながらイヴォンに詰め寄った。
「秀人！アルヴィ！助けてくれ！助け・・・！」
亜麻音が傘でイヴォンの頭を引っぱたいた。
「ぐわっ！」
続いて愛斗の蹴りが炸裂。
「ぎゃっ！」
イヴォンの悲鳴が平和な湿原を切り裂いた。

帰りのバス。
一名を除く全員が平和に過ごしていた。
「リリー、俺とした事が・・・すまなかったな・・・」
愛斗がリリーに必死に謝っている。
「いえ、大丈夫です」
どうやら二人の関係は崩れていないようだ。秀人はふと呟いた。
「あれ？イヴォンは？」
愛斗が床を蹴った。
「奴は特等席だ」

イヴォンはバスの下の荷物室で足と腕を縛られ、他の荷物と一緒に閉じ込められていた。
「愛斗！ごめん！もうしない！だから許してください！じゃないと吐きそう・・・」
イヴォンの地獄ツアーは始まったばかりだった。

6話　酔うと人は何をするか分からない（後書き）

秀「はい、司会の秀人です」

渚「同じく渚です」

ロ「どうした？テンション低いぞ？」

愛「当たり前だ！」

ロ「うわっ！変態！」

バキッ（ロランの何かが砕ける音）

愛「今回の件はどういう事だ？」

秀「だからイヴォンの惚れ薬的なヤツで・・・」

愛「イヴォンの事はどうでもいい。何故こうなってしまったんだ？」

渚「別にロラン君が変になってカミーユちゃんを襲う、でもよかったんじゃない？」

秀「でも愛斗とリリーの方がよかった、って事で」

愛「俺はリリーに何をしたんだ？」

リリー（以下、リ）「それは・・・」

愛「リリー！すまない！本当にすまない！」

渚「愛くん、もういいじゃない」

リ「そうですよ。別にいやじゃなかったですし・・・」

秀「えっ？」

渚「今の発言は私達の解釈から言うと・・・」

リ「い、言わないで下さい！」

愛「どうした？」

リ「何でも無いですよ。愛斗さん」

愛「そうか、なら本題に戻るぞ。俺はお前に何をしたんだ？」

リ「それはまず、飛び掛ってきて・・・」

渚「リリーちゃん、無理に言わなくても・・・」

愛「いや、リリー。全部言うんだ」

リ「それから・・・あの触ってきて・・・」

愛「何？」

リ「こんな事言えません！」

秀「あっ！」

愛「待ってくれ！リリー！」

渚「行っちゃったわね・・・」

ロ「秀人・・・鼻が・・・折れたかも・・・」

ドカッ！（ロランの何かが割れる音）

愛「秀人、俺はリリーの何をしたんだ？」

秀「いや・・・少し触ったて言うか・・・ね？」

渚「そうね。でも少しよね」

愛「何だ。何を俺が触ったんだ？」

秀「それはその・・・胸・・・っていうか・・・」

愛「何だと？」

渚「でも少しよ！」

愛「ぐわあああああああああ！」

秀「うあ！」

渚「きゃあ！」

ドタッ！（愛斗が地面に倒れる）

秀「気絶したね」

渚「したわね」

イ「いい気味だぜ！」

秀「イヴォン？生きていたの？」

イ「人を勝手に殺すな。で、リリーの様子はどうだった？」

渚「とっても恥ずかしそうだったわ」

イ「やっぱりな。あの薬は効果覿面だったな」

亜麻音（以下、亜）「その通りね」

秀「あっ、亜麻音さん」

亜「よくも恥をかかせたわね」

イ「待て！落ち着け！」

亜「蝙蝠傘って便利よね？」

バキッ（イヴォンの何かが砕け散った音）

イ「ぎゃあああああ！」

愛「ん？」

イヴォンに気付く

愛「イヴォン、貴様にはまだ恨みが残っている」
ドゴッ！（イヴォンの何かが折れた音）

イ「ひっ！」

愛&亜「まだまだ！」

イ「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ！」

秀「何かやばそうな雰囲気なので今日はここまでにしようか？」

渚「そうね。じゃあ今日はここまで」

秀&渚「次回もお楽しみに！」
イヴォンの悲鳴がＢＧＭです。

おしまい

7話　旅行において大変なのは資金調達（前書き）

今回は秀人君の資金調達の話です。
愛斗君のギャンブルシーンは割愛しました♪
ではどうぞ～☆

7話　旅行において大変なのは資金調達

遠足の次の週。
一年四組のセレブ、アルマ・ベルンシュタインがある話題を持ち込んでいた。
「皆さんに嬉しいお知らせがあるわよ。この度、我がベルンシュタイン財閥の豪華客船、「クイーンズベレー号」の処女航海にご招待しますわ」
クラスの全員が呆然とした。ロランが叫んだ。
「よっしゃ！豪華な船旅だぜ！」
その声にクラスが歓声に沸いた。アルマが厳しい口調で付け足した。
「ただし！条件がありますわ」
歓声が静まる。
「その条件とは、旅費は自分持ちという事ですわ」
「どういうことだ？」
イヴォンが疑問を顔に浮かべた。
「招待するというのは切符を買う権利は保障するという事。一等船客を希望なら五十万！二等船客を希望なら十万！三等船客でいいというのなら五万を私に持ってきなさい」
「何だ・・・金取るのかよ・・・」
ロランが悪態をこぼした。
「当然ですわ」
きっぱりと言い放ったアルマを尻目にして、愛斗とリリーは二人での会話をしていた。
「なあ、リリー。船旅に行きたいか？」
「はい、面白そうです」
愛斗も微笑み、立ち上がった。
「その話、乗ったぞ！」

「じゃあ僕も・・・」
アルヴィも愛斗に賛同した。
秀人は悩んでいたが、行きたいという気持ちの方が強かった。
「僕も行こうかな？」
秀人は誰にも聞こえないように呟いた。

放課後、秀人は校門を出た後に旅行について真剣に考えた。
「どうしようかな～。行きたいけどお金が無いし・・・」
秀人は寮で暮らしているので、大したお金は持っていない。旅費なんて払える自信は無い。
「やっぱ、バイトかな？でもそんな短期間で稼げるバイトなんて・・・」
秀人はしばらく考え込んだ。
「そうだ！他のみんなはどうやってお金を用意するのか聞いてみればいいんだ！」
秀人は走り出していった。

秀人が最初に行ったのはロランの所だった。
ロランはカミーユと一緒に買い物に行くところだった様だ。
「ロラン！旅費は用意出来た？」
「まあな、親に頼んで何とか五万なら」
秀人はがっくりと肩を落とした。
「そうか・・・」
親は頼れないからな。秀人は少し悔しくなった。

次に秀人が赴いたのはセドリックとアルヴィの所だった。
二人はコンビニで買ったお菓子を公園で食べている真っ最中だった。
「ねえ、ちょっといいかな？」
「別にいいぜ」

「何か用ですか？」
二人がほぼ同時に返事をする。
「いや、旅行の件なんだけどさ。行くんだよね？」
セドリックが少しの間を空けて答えた。
「ああ、親に頼んだらいいってよ」
「僕も貯金箱ひっくり返して掻き集めました」
秀人の貯金はどう掻き集めても二千三百円程度だ。貯金には頼れないだろう。
「そうなんだ。ありがとう、参考になったよ」
秀人はそう言い、公園を後にした。

秀人は若干、行き詰まって商店街を歩いていた。
「困ったな・・・」
皆が行くのなら僕も行きたい、その気持ちが秀人の心の中を支配していた。
「やあ、秀人君」
突然の声に驚いて、秀人は顔を上げた。
目の前には双子の兄妹、シルヴェストルとカリーヌがいた。
「ああ、こんにちは」
秀人は無理やり作った笑顔で誤魔化す。
「秀人君は旅行、行くんだよね？」
「ふぇっ！？はい！行きます！」
秀人は遂、二つ返事でオーケーしてしまった。
「そうだよね。実は僕達も二等船客の切符を買うことにしたんだよ」
「えっ！二等！？という事は二人で二十万！？」
「まあそう言うことになるね。まあ何とかなるさ」
秀人は意気消沈して、ふらふらとその場を立ち去っていった。
「どうしたんだ？秀人君」
「さあ？」
秀人は夢遊病者の様な足取りで商店街を出た。

「駄目だ・・・次元が違いすぎる・・・二十万？ふざけてるよ・・・」
秀人は先ほどの公園に戻った。ここで一から考え直す事にしたのだ。
「そうだ。次は女性陣に聞いてみようかな？」
秀人はまず渚の所へ赴いた。
渚の家は商店街から五分程のところの商店街にある。秀人は玄関の前に立った。
「思えば女子の家に尋ねた事ってあまり無いな・・・」
そう思うと緊張する秀人である。
「少し練習が必要だな・・・」
秀人は玄関に近づくと、ベルを押す真似をした。
「ガチャ、どちら様ですか？」
秀人が渚の声を真似て言った。
「やあ、渚。僕だよ。君のクラスメイトの識神秀人じゃないか」
「こんにちは、秀人君。どうかしたの？」
又もや口真似だ。
「いや、君の笑顔が見たくてね」
秀人は何気にとんでもない事を口走った。秀人の心境的には誰もいないから良し、としたのである。
「いきなりそんな事言われても・・・私・・・照れます・・・」
「いや、照れる事なんてないさ。君の頬を赤らめたその笑顔も素敵だけどね」
「いやですわ。そんな・・・」
秀人は自分の世界に溺れていた。
「あの秀人君？どうしたの？」
気が付くと、後ろには本物の渚が立っていた。
「うわあああああ！渚！？何時から？」
渚は少し微笑みながら返した。
「さっきからよ」

「え？じゃあ今のやり取りも？」
「ええ、秀人君って以外となのね」
秀人は頭を抱え込んだ。
「誤解しないで！ちょっと調子に乗ってたんだ！決してヘンな意味ではないよ！」
秀人は必死に弁解したが、渚の笑みは恐ろしい程に崩れる事は無かった。
気まずくなった秀人はそそくさとその場を後にした。

秀人はもう一度初心に帰り、考える事にした。
「次はイヴォンに聞いてみようかな？」
秀人はイヴォンのカジノに行く事にした。
イヴォンのカジノはとてつもない大きさだ。秀人は入り口を潜り、カウンターに向かった。感じのいい店員が笑みを返す。
「いらっしゃいませ！」
秀人は店員に名札を見せた。
「識神秀人っていう者ですけど、イヴォン君はいますか？」
店員は笑顔で頷き、奥に向かって叫んだ。
「イヴォンさん！お客さんですよ！」
呼ばれて直ぐにイヴォンは出て来た。顔は結構上機嫌だ。
「よお、どうした？秀人」
「いや、旅行の費用の事なんだけど・・・」
「旅行？ああ、切符代か。俺はちゃんと用意してあるぜ」
秀人はまた肩を落とした。
「そうか。実はね・・・」
秀人は正直に切符代が無い事を話した。その上で何か方法を考えてもらうつもりだった。
話を聞いたイヴォンは携帯電話を手にとった。
「何だよ、そんな事か。まあ俺に任せろ」
イヴォンは携帯電話で電話を掛けた。

「ああ、今すぐ来てくれ」
イヴォンが電話の中で短いやり取りを終え、秀人を見た。
「少し待ってろよ。救世主が来るぜ」

二十分後、現れたのは愛斗だった。
「愛斗？どうしてここに？」
愛斗は辺りを見回した。
「イヴォンから呼ばれた。急用らしいが・・・」
丁度イヴォンが奥から出て来た。
「おお、愛斗！秀人の旅行のために一肌脱いでくれ！」
「もしかして・・・イヴォン？」
秀人が疑問の目でイヴォンを見る。
「その通り、ギャンブルだぜ！」
やっぱりか・・・。秀人は予想通りの答えだったので驚きもしなかったが、これから起こることは誰にでも予想がついた。
「いいか、愛斗？儲けていいのは五万までだ。お前にやらせると際限無く、金を客から毟り取るからな」
「分かった」
愛斗は短く返事をし、テーブルへと向かった。
「いいのかな？こんな事で儲けて」
しかし、そんな秀人の呟きは誰にも聞こえていなかった。
数時間後、泣きながら店を出て行く客を秀人は何人も目撃したそうな。

7話　旅行において大変なのは資金調達（後書き）

秀「え～と、今回は僕が主役の話なのかな？」

渚「まあそうね」

秀「あまり見所も特に無い話だけどね・・・」

渚「あると言えば、一人で三文芝居の件だけね」

秀「渚、あれは別にヘンな意味じゃなくて・・・」

渚「分かってるわよ」（怖い笑顔）

秀「怖いよ・・・何か今日の渚は怖いよ・・・」

渚「気のせいよ。まあ、以外な発見だったけどね」

秀「渚！絶対誤解してるよね！」

渚「気のせいよ。気・の・せ・い」

秀「（そうなのかな～）」

渚「実の話、今回の話は別にやるつもりは無かったんですよね」

秀「そうなの？」

渚「うん。秀人君は普通過ぎて、話の主役にしても面白くなるかど

うかってことで本当はやらない筈だったのよね」

秀「じゃあ何で？」

渚「秀人君が旅行費に困って模索する話は大分前からやりたいと思っていたらしいので」

秀「じゃあもしこの話をやらなかったら何をやるつもりだったの？」

渚「それは愛くんとリリーちゃんの遠足後の夜の話をするつもりだったらしいみたいね」

秀「確かにそっちの方が受けそうな気がする・・・」

渚「後、正直言うと秀人君の話にはお色気要素が入りにくいみたいなの」

秀「そうだよね・・・」

渚「後、面白みが無いとうのもあるわ」

秀「仰るとおりです・・・」

渚「後はルックスが普通だと言うのも・・・」

秀「うわあああああ！」

渚「あ！秀人君！」

愛「逃げたな・・・」

渚「あら、愛くん」

愛「秀人は心に深い傷を負ったようだな・・・」

渚「私って以外と毒舌？」

愛「そのようだな・・・」

渚「・・・ではまた次回・・・」

愛「次回は船旅編に突入だ。乞うご期待を」

おしまい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6767m/

秀人と愛斗！～The Another Story～

2010年10月8日14時38分発行